

15. ^{99m}Tc -phytateによる肝血流分析

—肝腫瘍での検討—

平田 和文 遠藤 浩 (倉敷中央病院・内)
赤松 義真 山本 修三 河原 泰人
重康 牧夫 (同・放)

演者らは、 ^{99m}Tc -phytateを用いた通常の肝シンチグラフィの際、同時に肝血流分析を行える方法を開発し、すでに報告した(第23回日本核医学会総会)。今回は、前述の方法を用い肝腫瘍での血流動態につき検討を加えたので報告する。肝細胞癌8例(すべて肝硬変に合併)、胆管細胞癌1例、転移性肝癌7例の16症例を対象とし、癌部と非癌部に分けて分析した。その結果、癌部では全例肝動脈血成分が優位であることが確認された。これに対し、非癌部では肝硬変の有無により門脈血成分比に差が認められた。このことより、肝腫瘍症例における非癌部の血流分析は、肝障害度の指標として治療上重要であると思われた。

16. ^{133}Xe による肝血流動態の解析

安原 美文 村瀬 研也 渡辺 裕司
最上 博 管田 成紀 河村 幸子
飯尾 篤 浜本 研 (愛媛大・放)
宮内聰一郎 赤松 輿一 太田 康幸
(同・三内)

肝循環の分析は、肝疾患の病態把握に重要であり、その方法にはさまざまなものがある。

われわれは、 ^{133}Xe を用いて、肝血流量の測定を行ったが、その際、バルーンカテーテルを使用することにより、門脈血流量を分離して測定する方法を考案した。その結果、肝血流量は、chronic hepatitis, liver cirrhosisと病態が進むにつれて、総肝血流量、門脈血流量ともに低下し、control群とliver cirrhosis群の間には有意な差が認められた。また、複数回測定を行ったものについては、良好な再現性が得られ、検査の精度は高いと考えられた。さらに、本検査の結果は、他の各種検査の結果とも良好な相関を示した。

17. Rotor病の肝、胆道シンチグラフィー

吉田 祥二 上池 修 猪俣 泰典
小原 秀一 前田 知穂 (高知医大・放)
赤木 直樹 浜田富三雄 (同・放部)

肝臓の色素代謝過程からみて、 ^{131}I -BSP類似の ^{99m}Tc -HIDA、ならびに ^{131}I -Rosebengal類似の ^{99m}Tc -PIを用いて体質性黄疸の鑑別を行う報告がこれまでにみられる。

Rotor病(Rotor型過ビリルビン血症)においては肝代謝性色素の肝摂取能が著しく障害されており、肝内の輸送、排泄能について画像の上で認識することは困難である。

^{99m}Tc -PIよりも肝内移送が早く、尿中への排泄の少ない ^{99m}Tc -PMTをRotor病症例に使用し、Rotor病の良好な胆道系への排泄機能の病態をより明瞭に把握できたので報告した。

なお、同時期に施行した ^{99m}Tc -EHIDA肝、胆道シンチグラフィーでは、Rotor病の肝よりの胆道系への移送のimagingは不可能であった。

18. ^{99m}Tc -PMTによる胆道ジスキネジー患者の胆道動態機能検索

篠原 功 伊東 久雄 村瀬 研也
渡辺 裕司 石川 元正 玉井 晋
最上 博 飯尾 篤 浜本 研
(愛媛大・放)

正常人10例、胆道ジスキネジー患者48例を対象とし、 ^{99m}Tc -PMTを使用した肝、胆道系シンチグラフィーを用いてその胆道動態解析を試みた。心、肝内総肝管、胆囊、総胆管および小腸部にROI設置し、得られたtime-activity曲線より各種パラメーターを得て、胆囊の運動性および緊張性を定量的に評価した。

その結果、胆囊収縮剤投与後の胆囊収縮分画および収縮率が胆囊運動性を、また胆管影出現より腸管出現までの時間、および胆囊への胆汁流入パターンが胆囊緊張性をそれぞれ示すよい指標となり得る可能性があると考えられた。